



第4回
健康医療ベンチャー大賞
報告書

KEIO HEALTHCARE
VENTURE CONTEST

未来の医療は、ここから始まる。

慶應義塾大学医学部だからできる
臨床と研究に基づく新たなビジネスコンテスト



主催

慶應義塾大学医学部

共催

慶應義塾大学理工学部

慶應義塾大学ビジネス・スクール

慶應義塾大学イノベーション推進本部

概要

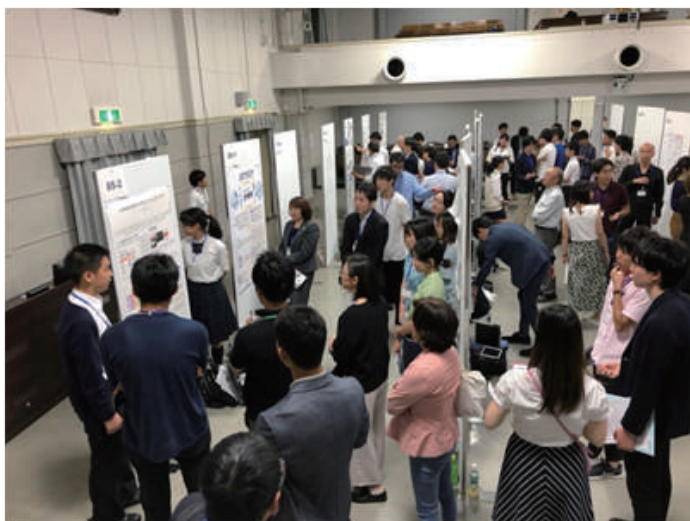
2015年に学校教育法が改正され、大学の役割として研究成果の社会実装、イノベーションが加えられました。それに呼応して慶應義塾大学医学部では、2016年より知財産業連携タスクフォースが設立され、その活動の一環として健康医療ベンチャー大賞を開始しました。以来、学外からも広くベンチャーを募集し、慶應医学部の支援によりヘルスケアを牽引するベンチャーが多数輩出されることを目指し、活動を続けています。

第4回からの新しい取り組み

ーポスター発表形式による1次審査の導入

第3回まで書類選考で行なっていた1次審査をポスター発表による審査に変更致しました。これにより多くのチームが信濃町キャンパス北里講堂に一堂に会して、他のチームのプランも見えて交流し学び合うことができるようになりました。また各分野の専門家から審査を通じて直接フィードバックが得られるようになりました。

[ポスター審査 当日の様子]



ー連携企画である医療機器アプリ開発ハッカソン(K-MAH)を拡大

第3回からベンチャー大賞の連携企画として開始した医療機器アプリ開発ハッカソン(K-MAH)を昨年の2日間連続の開催から、1週間間を空けた2日間の開催に変更し、1週間のアプリ開発期間を取ることで、よりハイレベルな医療機器アプリ開発体験ができるようになりました。

応募資格

- ・法人・チーム・個人は不問。複数名で応募する場合は必ずチームリーダーを指名すること。
- ・チームリーダーは事業のあらゆる側面を把握し、1次審査、2次審査、メンタリング、決勝大会に参加できること。
- ・提出プランを既に法人で事業化している場合は、法人化5年以内であること。
- ・社会人経験を有するメンバーがチームにいる場合、学生部門での応募は不可。社会人経験のない大学院生は社会人部門/学生部門のどちらでも応募可能。

募集プラン

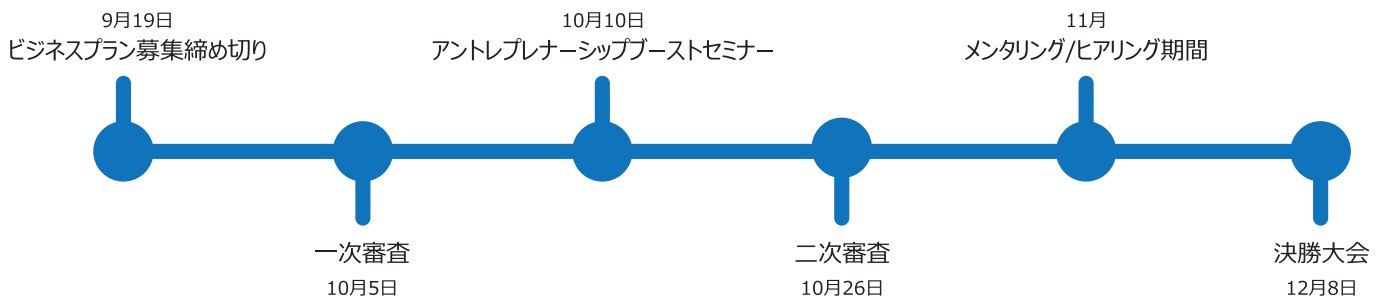
- ・創業、遺伝子、医療介護連携、ビッグデータ、人工知能、 スマートフォンアプリ、ウェアラブルデバイスなど、病院での医療に限局せず、医療・健康に貢献するプランを広く募集する。
- ・ハイテク、ローテク、特許性も問わない。(例：病院食の改善、 海外旅行時の医療トラブルサポートなど)



決勝までの流れ

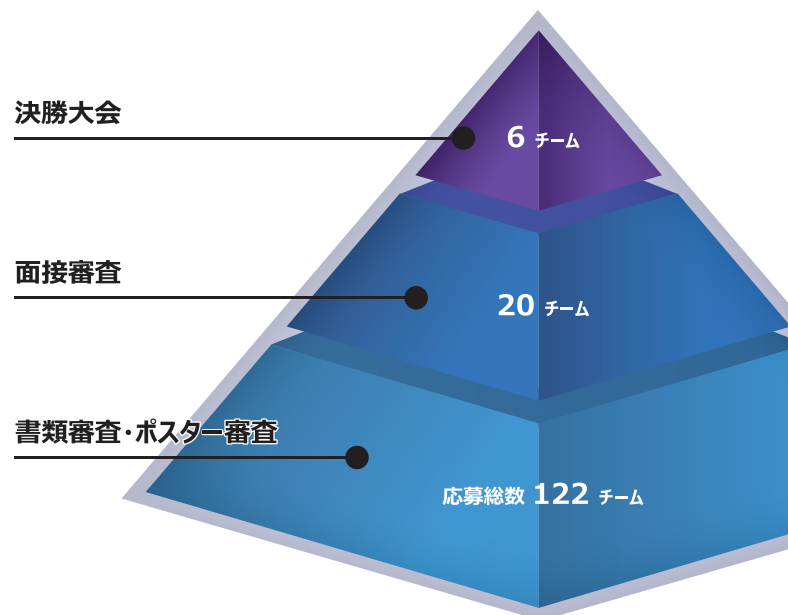
決勝までの流れ

提出いただいたビジネスプランに基づき、書類審査のみの0次審査が行われ、提出要件が確認されます。通過したチームは一次ポスター審査に参加し、20チームが選考されます。それらのチームにはアントレプレナーブーストセミナーに参加する権利が与えられ、二次選考に向けてビジネスプランを強化します。二次選考は専門家による面接審査となり、6チームが選考されます。これらのチームは医療者や事業家、投資家によるメンタリングを受け、決勝大会に望みます。



応募状況

第4回となる今年は過去最大の総計122チームからの応募がありました。一次審査は今年からはじめてポスター選考で行い、学生部門・社会人部門各10チームずつが選考されました。続く二次審査では面接審査を行い、学生部門・社会人部門各3チームずつが選考され、優勝を争いました。また、惜しくも二次審査で敗れた残りのチームは決勝大会でショートピッチを行いました。



優勝賞金・副賞

- ・社会人部門優勝賞金 100万円
- ・学生部門優勝賞金 30万円
- ・PLAMED賞 医師へのインターネットアンケート実施（10問200サンプル、80万円相当）権
- ・LINK-J × 慶應義塾大学賞 LINK-J会員 会費1年分と入会金免除
- ・Sony Startup Acceleration Program 賞【プロトタイピングプラン 要素技術検証支援】
- ・社会人部門 オーディエンス賞 賞金10万円
- ・学生部門 オーディエンス賞 賞金3万円



**慶應義塾大学医学部長
天谷 雅行**

この度、慶應義塾大学医学部主催第4回「健康医療ベンチャー大賞」が開催されますことを大変嬉しく思います。

大学の発展には、大学発ベンチャーの育成を欠かすことはできません。大学の知財をいち早く社会に役立て、日本経済の一翼となること、ひいては国際社会における日本の底力となるべく、産官学民の集結した知財産業連携が強く求められております。慶應義塾大学では、文部科学省の「オープンイノベーション機構の整備事業」の採択を受けて、イノベーション推進本部を2018年11月1日に開設し、起業推進および支援体制構築の強化のためメディカル・ヘルスケア領域を設置しております。「健康医療ベンチャー大賞」も4回目を迎え、ベンチャー企業の設立、活動をより一層活性化させ、創造性豊かな人材育成、プロジェクトの推進を目指しています。

慶應義塾大学医学部・医学研究科は、建学の祖である福澤諭吉先生の「実学の精神」、「独立自尊」、「半学半教」の精神、そして初代医学部長の北里柴三郎先生の「基礎・臨床一体型医学・医療の実現」を理念に掲げ、開設102年目を迎えています。その創造性豊かな教育、独創的かつ先駆的な研究、患者中心の医療の提供など、慶應義塾における活動は、すでに社会で高く評価されています。そして、さらに新たな知財産業連携への取り組みが活発化し、社会の中で多くの貴重な芽となり、たくさんの花を咲かせることを願っています。

健康医療ベンチャー大賞も4年目を迎え、加速度的に発展しています。今年度は過去最高の122チームからの応募がありました。また、1次審査を北里講堂でのポスター審査形式に変更し、約70チームが一堂に会し他のチームのプランを見て交流する機会を設けることができました。決勝大会では、厳しい競争を勝ち抜いてきた6チームが競い合います。サイエンスとテクノロジーの進歩により、時代が大きく変わろうとしている今、この健康医療ベンチャー大賞が、我々慶應義塾のみならず、広く日本と国際社会に貢献し、新たな歴史を築いていくことを期待しています。



**慶應義塾大学医学部
慶應医学部発
ベンチャー協議会議長
坪田 一男**

「慶應医学部からベンチャー100社創出!」をねらいたい。これが2015年、医学部長だった岡野栄之先生から依頼されたミッションでした。『健康医療ベンチャー大賞』は、スタートアップベンチャーの発掘と育成のため、慶應イノベーションのエコシステムのひとつとしてスタートしたのです!

毎年、応募チームが増えてきて、慶應ベンチャーのシンボル!として成長してきており、とても嬉しく思います。

慶應医学部でのイノベーションへの取り組みはここ数年で大きく広がり、ベンチャーカフェ、ベンチャー協議会によるスタートアップセミナー、東京証券取引所見学会やベンチャーサミットの開催など、活発化してきています。さらに、来年度からは大学院にアントレプレナー育成コースも開設され、医学生の教育からイノベーションを学ぶことができるようになります。

病院の2号棟5階には、産学連携等のための賃貸借スペースが整備されており、現在3社の慶應医学部発ベンチャーが入居しています。

また、文部科学省の整備事業の一環として三田にもイノベーション推進本部が設置され、2015年に設立された慶應イノベーション・イニシアティブ(KII)とともに、慶應発のスタートアップベンチャー育成と支援に注力していく体制が充実し、今後の慶應イノベーションのさらなる飛躍が期待されています。

さて、今年のベンチャー大賞についてですが、今回より、選考方式を少し変えました。これまで書類選考だった1次審査を今年から北里講堂でのポスター審査形式にしました。ビジネスコンテストでポスター審査はおそらく史上初! 審査員の先生方より「アカデミア発らしい素晴らしい企画!!」と絶賛されました。ご期待ください。

また、メンタリングも個別マッチング方式にして、一段と充実した支援体制となっています。

素晴らしい技術や研究成果、ユニークなアイデアなどの種はたくさんあるでしょう。その将来性を見出し、育てていくことは、大学の大切な使命であり、この医学部発健康医療ベンチャー大賞が未来へ繋がる道のドアを開くその貴重な時と場となることを確信しています。ヘルスサイエンスの技術が、しっかりと日本で産業として育成され、日本社会の力となるよう、ここから巣立っていくことを期待しています。

シンポジウムの様子

シンポジウム1

大学発ヘルスケアベンチャー創出の未来 ～慶應医学部での取り組みから考える～

モデレーター 坪田一男（慶應義塾大学 医学部教授 医学部発ベンチャー協議会 議長）
シンポジスト 國領 二郎（慶應義塾大学 常任理事）
中村 雅也（慶應義塾大学医学部 教授/医学部長補佐（産学連携担当））
山岸 広太郎（株式会社慶應イノベーション・イニシアティブ 代表取締役社長）



シンポジウム1では冒頭にモデレーターの坪田氏より、慶應医学部の最新のベンチャー活動をお話頂きました。本ベンチャー大賞発足の契機である学校教育法の改正、これにより大学の責務にイノベーションが含まれるようになったこと、その後、慶應医学部内ではベンチャー起業が活性化され、慶應義塾では文部科学省予算によりイノベーション推進本部が設立されたことなどが紹介されました。そして、医学部内での起業意識調査アンケートでは、4年前には起業したい人が11%だったのに対して、今回は50%を超え、慶應医学部内で起業意識の高まりが急速に進んでいることを会場に伝えられました。

続いて國領氏から、慶應では1996年から23年間、ベンチャー育成に取り組んでいるが、この4年で特に医学部ではベンチャー育成が一気に進んでいる点をご指摘頂き、その理由として以前は医療分野は研究開発期間が長くベンチャーに向かなかったところが、最近は技術の進歩でベンチャーでも戦える領域に変わってきたことが挙げられました。

中村氏からは、これまで医学部では坪田氏が10年以上前からイノベーションの重要性を訴えてきたが、やっと医学部全体でイノベーションムードが高まりつつあり、今後は医学部が組織としてイノベーションを推進し、臨床家が診療や研究だけでなく、自ら新しい医療を社会実装する組織基盤を作ることが重要になってくるとお話されました。そのためには人材育成、教育が最も重要で、医学部教育の早い段階から取り入れていくことが大事だとコメントされました。

山岸氏からは大学知財に大きな可能性を見出して、慶應発ベンチャーに投資を開始して3年半が立ち、学部としては医学部が最も多く投資先としての関係があること、それらは予想以上に上手くいっていることをお話頂きました。また、こういったベンチャー投資を通じて、大学に経済価値を還元する方法として、知財や株式を利用して仕組み化していくことは可能であると考えているとコメントされました。



シンポジウム2

若手アントレプレナーから見た、大学発でベンチャーを起業する意味

モデレーター 田澤 雄基（慶應義塾大学医学部 精神・神経科学教室/健康医療ベンチャー大賞実行委員長）
シンポジスト 吉永 和貴（株式会社Flixty 代表取締役）
二宮 英樹（慶應義塾大学医学部 医療政策・管理学教室/株式会社データック 代表取締役）

シンポジウム2は田澤氏のモデレートで、特に医学生や若手医師のキャリアパスの参考になるように、シンポジスト2名のこれまでのキャリアと、その決定の背景にあった考え方が紐解かれました。

二宮氏は脳外科でのレジデント期間の後、ベンチャーに入社、その後、慶應医学部の医療政策管理学教室で博士課程に進まれ、同時に起業されました。このようなキャリアを選んだ理由として、ベンチャーに入社した際に、周りの先輩医師と比較して、自分に専門性が乏しく、医療特有の業界構造について知識が乏しいことも痛感し、データ解析を強みにしたいと博士課程への入学を決めたこととお話されました。それによって慶應との関係ができて、医学部の中でもベンチャー育成が進む慶應の自由闊達な雰囲気の魅力を感じているというお話もありました。

吉永氏は医師3年目の際に海外のデータサイエンスの大学院に留学して研鑽を積む予定が、入試が厳しく、他の道を模索していたところ、確信の持てるサービスアイデアを思いつき、起業の道を選んだとお話されました。最初は厳しい道で、これからどうしようかと悩むことも多かったけれども、ある時期にその場でサービスを購入手配してくれたクライアントが現れ、そこからこれならいけるという自信ができ、軌道に乗ったということです。

また、医師はアルバイトでも十分に稼げるため、個人としては起業しやすいが、一方でそうでない創業メンバーとの環境の乖離についてのコミュニケーションが重要であるともコメント頂きました。そして、起業するかどうか意思決定する際の指標として、そのアイデアを考えると眠れなくなるほどのアイデアが見つかった時が起業すべきタイミングだと、会場にアドバイスを頂きました。





中村 雅也 氏

慶應義塾大学医学部 教授 /
医学部長補佐（産学連携担当）



杉山 直人 氏

慶應義塾大学イノベーション推進本部
統括クリエイティブ・マネージャー



満倉 靖恵 氏

慶應義塾大学理工学部 教授



千本 倅生 氏

株式会社レノバ 代表取締役会長



安宅 和人 氏

慶應義塾大学環境情報学部
教授 / ヤフー株式会社 CSO



山岸 広太郎 氏

株式会社慶應イノベーション・イニシア
ティブ代表取締役社長



河野 宏和 氏

慶應義塾大学大学院経営管理
研究科 教授 /
ビジネス・スクール 教授



米津 雅史 氏

東京都 戦略政策推進本部
特区推進担当部長

決勝大会概要

学生部門・社会人部門各3チームが200名を超える観衆の前でプレゼンテーションを行いました。学生部門では自動グラム染色機器と菌種の同定のアプリケーション、吃音治療のアプリケーション、摂食困難者のための完全栄養チョコレートなど柔軟な発想ながら社会の問題を的確に捉えたプランが発表されました。社会人部門は乳酸センシングによる疲労可視化サービスや脳卒中片麻痺患者用の新しい形の杖、介護情報プラットフォームといったしっかりとターゲット層を意識したプランで既に機器の開発や今後の臨床研究、実証実験の準備も進んでいるプランもあり、大変ハイレベルな戦いとなりました。質疑応答では審査員の先生方からの鋭い御質問や御指摘、アドバイスなどがもたらされ、活発な討論がなされました。

また惜しくも決勝大会まで進めなかったものの2次審査で高評価を得たチーム(学生部門3チーム、社会人部門4チーム)がライトニングトークを行いました。短時間にプラン内容と情熱を凝縮させたプレゼンテーションは迫力があり、今後の活躍が期待されました。

応募数が年々増加し、審査通過の競争率が高くなる中、選ばれたプランはいずれもより良い医療、健康社会のために知恵が絞られており、会場は高い熱量で大いに盛り上がりました。



表彰式の様子

慶應イノベーション・イニシアティブ(2016年に設立された慶應発のベンチャーキャピタル)社長である山岸広太郎審査委員長より審査総評が述べられ、続いて天谷雅行医学部長より、厳正な審査の結果が発表されました。

学生部門最優秀賞はチーム「GramEye」(大阪大学医学部医学科 平岡 悠氏ほか)が受賞しました。グラム染色を自動で行うロボットと、染色画像の菌株同定を機械学習で行うスマホアプリで、大きな社会的課題に取り組むとともに、今後の世界進出も含めた野心的な試みが評価されました。さらに三井不動産様によるLINK-J賞、Sony様によるSony Startup Acceleration Program賞も受賞し、更なるネットワークの拡大が期待されます。

社会人部門最優秀賞は、チーム「株式会社グレースイメージング」(株式会社グレースイメージング 中島 大輔氏ほか)です。汗中乳酸測定ウェアラブルデバイスの開発や新しいMRI測定方法による筋肉の質的解析を可能にする革新的な技術だけでなく、市場性調査も的確であった点が大いに評価されました。

オーディエンス賞は、「株式会社グレースイメージング」(株式会社グレースイメージング 中島 大輔氏ほか)、「プロジェクトPOST」(プロジェクトPOST 許 恵介氏ほか)が制し、審査員だけでなく200名を超える観客の心も掴んだ結果となりました。さらに、「プロジェクトPOST」はPLAMED様によるPLAMED賞も受賞しました。



閉会式

天谷 雅行 慶應義塾大学医学部長

医療の現場では、期待されていることを期待どおりにやるということが要求されます。医学部の試験にある空気というのは、その意識からの緊張感。でも、本ベンチャー大賞にある空気は“熱”です。医療の現場にいる方の何かを変えたいという思いから起こる熱だと思いました。この違いは非常にコントラストがあると思いました。やはりこの熱を大切にしていかなければなりません。医学部としては医師を育てるために最低のことを共有していかなければなりません、それだけではないことが今ここで起こっています。大学にとって、医学部にとって、大学発ベンチャーの育成は最重要課題の一つです。今回4回目まで、慶應義塾の総力をかけてここまで来たことを本当に嬉しく思いますし、大学医学部としてどう取り入れていけるのかということを真剣に考え、場をつくっていきたいと思います。



坪田 一男 慶應義塾大学医学部 教授 慶應医学部発ベンチャー協議会議長

4年前に企画した時にオール慶應になったらいいなと思っていましたが、今やKBS、理工学部、経済学部、SFCが協催してくださり、まさにオール慶應になってきたことを本当に嬉しく思います。

やはり医学部というものは臨床、研究、教育が基本であり、そこは崩したくないと思っています。医師としての自分の立ち位置をしっかりとさせた後で、患者さまに信頼されるドクター、教育もできるドクター、そして研究マインドを持ったドクターとなってから新しいスタートアップをしていくというのが一つの基本だと思っています。眼科から5社ベンチャーが出ており1社は既に上場しています。いずれもCEOは眼科医がやっていますが、全員専門医を持って医師としても立派に活躍してくれています。医学部発ベンチャー協議会というものを作りましたが、そこでも基本のキャリアパスなどを提示した方がいいと考えています。

これからどんどん新しいことが起きていくでしょう。世界と戦っていくためにも多様性を大切にしながら前へ進んでいければと思います。来年も第5回健康医療ベンチャーを企画しております。皆さまにはぜひまた来年もご参加していただければと思います。



懇親会

□乾杯前のご挨拶： 西川 和見 氏 経済産業省 ヘルスケア産業課長

□乾杯のご挨拶： 河野 宏和 氏 慶應義塾大学大学院経営管理研究科 教授 / ビジネス・スクール 教授

□中締めのご挨拶： 満倉 靖江 氏 慶應義塾大学理工学部教授



学生部門優勝チーム紹介

学生部門優勝 & LINK-J賞 & Sony Startup Acceleration Program賞

GramEye (GramEye)

・事業内容紹介

2050年、薬剤耐性菌による死亡者数はがんを上回るとされており、人類がこれから真剣に取り組まなければならない課題となっています。私たちは、染色を自動で行うロボgetgram、機械学習でグラム染色画像の菌株同定を行うスマホアプリGramEyeを開発しました。菌種同定のハードルを下げ、抗菌薬が適正に利用されることにより、薬剤耐性菌の発生を防ぎ、患者の予後の向上、医療費の削減が期待できます。

・ベンチャー大賞の感想

コンテストを通して、他参加チームの方々、審査員やメンターの方々、決勝大会でお声がけいただいた方々、多くの人とのご縁を持つことができました。自分自身大きく成長することができたと思っておりますし、今後プロジェクトを進めていくために必要な出会いのきっかけを多くいただきました。ベンチャー大賞を通して出会った方に恥ずかしくないような結果を出せるように、これからさらに精進していきたいと考えております。

・今後の展望

実際に臨床現場で使ってもらえるようにプロダクトにさらに磨きをかけていきたいと思っております。日本のグラム染色が行われていない病院への導入、海外展開を実現することによって、薬剤耐性菌問題解決を目指したいと思っています。

【チームメンバー構成】

大阪大学医学部医学科 6年 1名、大阪大学医学部医学科 4年 1名、慶應義塾大学医学部医学科 2年 1名
和歌山県立医科大学医学部2年 1名、大阪大学医学部医学科 2年 2名



社会人部門優勝チーム紹介

社会人部門優勝 & オーディエンス賞 (社会人部門)

汗中乳酸センサを用いた医療/スポーツサービス (株式会社グレースイメージング)

・事業内容紹介

弊社では医療・スポーツにおける筋疲労・筋負荷量をウェアラブルデバイスにて可視化するサービス提供の検討を行っています。医療とりわけ運動機能回復リハビリテーションや筋力維持を目的とした運動療法、またはスポーツにおけるトレーニングやコンディショニングでは、筋疲労・筋負荷量を計測することは重要です。しかしこれまで、主観的評価法や運動量での間接的評価法しかなく定量的な評価法はありませんでした。そこで弊社では筋疲労物質である乳酸の汗中含有量を直接かつ連続的に計測可能なウェアラブルデバイスを用い、筋疲労・筋負荷量を可視化、筋疲労・筋負荷量を統合解析するサービスシステムを構築中です。まずは心疾患をターゲットにした心臓リハビリテーションおよび、スポーツジムでのユースケースを想定したサービスローンチを目指しています。

・ベンチャー大賞の感想

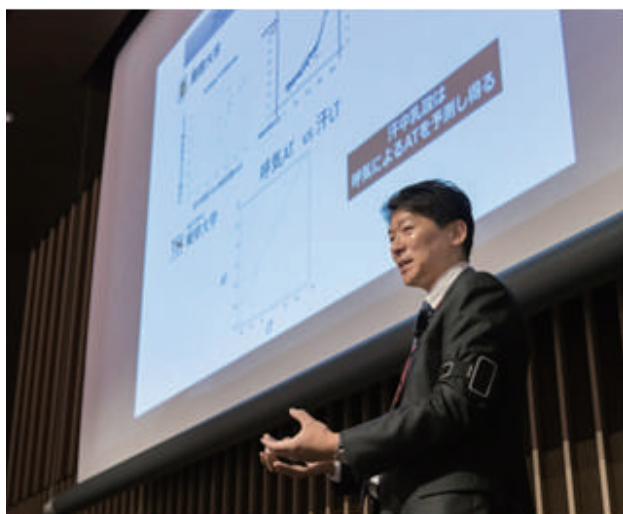
弊社は新しい技術を元にしたスタートアップですが、最初の課題として当技術をどのように社会実装していくか、確固たるビジネスモデル構築を行う必要がありました。そのため2018年夏に登記しこの1年ビジネスモデルを醸成させて参りましたが、今回ベンチャー大賞にて多くのヘルスケア領域のエキスパートから広くフィードバックを受けることが出来ればと考え応募させて頂きました。今回合計3回のピッチを行いました、それぞれ多岐の分野にわたるエキスパートが審査員として参加され大変有意義なフィードバックを受ける事が出来ました。またメンタリングでは、費用面や高いアクセス障壁のためなかなかお会いするチャンスを得られない方々からのアドバイスを受ける事ができ、このような人的資源こそがベンチャー大賞の素晴らしい特徴であると感じております。発信力も目を見張るものがあり、多くのメディアや機関の方々より今後のPRやビジネス展開のお話を頂戴し、弊社のビジネスを大きく推進させるものになりました。あまたある同様のイベントと比較しても単なるピッチイベントに留まらない、ビジネスを強力に推進することが出来る素晴らしいイベントだと確信しております。

・今後の展望

現在我々は、ハードウェア、ソフトウェアのプロトタイプ作成を終え、実証試験を進めています。早期のサービスインを目標に活動しておりますが、同時に他分野での展開を進め今後の成長の為にアップサイドの最大化を図る予定です。最終的には、ウォークマンやスマホが登場した時の様に生活スタイルを一変させるような、世界初の生活に密着した生体代謝物質をモニタリングできるウェアラブルデバイスを提案していきたいと考えています。

【チームメンバー構成】

(株) グレースイメージング 4名



学生部門決勝進出チーム紹介

学生部門第2位 & オーディエンス賞(学生部門) & Plamed賞

ポケット言語聴覚士 post (プロジェクトPOST)

・事業内容紹介

日本に100万人いる成人吃音者、通称<どもり>。私たちは日々、様々な辛い思いをした結果、約4割が社交不安障害を発症し、自殺を考える人も後を断ちません。しかし、多くの苦しむ吃音者がいるにもかかわらず、吃音を診てくれる医療機関、医療従事者が圧倒的に不足しているという厳しい現実があります。「なぜ、我々は取り残されなければならないのか」「最新のテクノロジーでなんとかできないのか」我々はそうした思いのもと、音声認識AIを用いた吃音治療のためのデジタル医療機器作成を目指しております。

・ベンチャー大賞の感想

健康医療ベンチャー大賞に出場して思ったのは、とてもコスパが良いということです。この大会では一度に様々なサイドからアドバイスを聞くことができました。起業家サイドはもちろん、投資家サイド、医療サイドやエンジニアサイドからのアドバイスまで、一度に様々な観点からアドバイスをもらえたのが、とても良かったと思います。これもあらゆるネットワークを持つ慶應だからこそ、できることだと思っています。

・今後の展望

今後の展望としては、ひたすら愚直に進むことだと考えております。今回のこの健康医療ベンチャー大賞を通じて、チームビルディングや事業計画で様々な課題が見つかったと思っています。それは審査員からの指摘だけでなく、この大会を通じて知り合ったいろんな人生の先輩からも、たくさんの有意義なご指摘をいただきました。そうした課題を一つ一つ潰していく、それが私たちのビジョン実現への近道なのではないかと思っています。



【チームメンバー構成】慶應ビジネススクール (KBS) 1名、東京理科大学大学院 1名

学生部門第3位

大切な人へ、食べる喜びと栄養を贈るチョコレート (SpinLife)

・事業内容紹介

疾患による摂食困難者に対して新しい栄養摂取の形として、完全栄養チョコレートの「andew」を開発、提供する。完全栄養とは、タンパク質からビタミン、ミネラル、微量元素にわたるまで人間の機能維持に必要な全ての栄養素を含む概念を指す言葉である。完全栄養のチョコレートは私たちが調べた上では、世界初である(特許出願済)。私たちは、表皮水疱症という遺伝性の皮膚難病の患者さんとともに「andew」の商品開発に当たった。開発当初は、代表の中村の一人暮らしの部屋で試作を繰り返していた。その後、北海道内のメーカーの協力を得、着想から半年で製品化までこぎつけた。私たちは、本事業を通して「患者と周囲の人々が病気と共存し、理解し合い、手を取り合う世界」を実現することが大きなビジョンである。

・ベンチャー大賞の感想

本ベンチャー大賞は、私が参加する初めてのビジネスコンテストであった。他のビジネスコンテストとは異なり、参加者も審査員もヘルスケアへの造詣が深く、クリティカルな議論ができたことは非常に良かった。また、決勝進出者に与えられる慶應医学部の医療者からのメンタリングの機会は非常に勉強になった。私は、リハビリテーション科の都築医師にメンタリングをしていただき、臨床現場視点のフィードバックをいただいたことがその後の事業の展開の大きな指針になっている。さらに、ヘルスケアの世界をビジネスで変えようと奮闘する多くの同世代の仲間に出会えたことは今後の大きな財産になると確信している。

・今後の展望

今後は、自社ECサイトを介したDtoC(Direct to Consumer)モデルで販売し、ユーザーの声を直接聞き、速やかにプロダクトの改良に反映させることで、より患者さんのニーズにマッチしたプロダクトを開発していく。さらに、北海道大学の各機関にご協力いただき、口腔内障害や嚥下障害を有する患者さんに安全に適応するための物性評価などの研究を行う予定である。大学発のスタートアップの醍醐味である大学の研究機関との連携が実現しつつあることに興奮している。また、医療における社会課題の解決と経済性の両立は、ヘルスケアスタートアップの永遠の課題だと感じているので、両者のバランスをうまく取りながら事業を拡大していきたい。



【チームメンバー構成】北海道大学医学部医学科3年 1名、天使大学看護栄養学部栄養学科4年 1名

社会人部門決勝進出チーム紹介

社会人部門第2位

片麻痺者用杖（名称：Fuji）の開発と販売（株式会社Welloop）

・事業内容紹介

片麻痺者用杖の開発・販売を目指しています。片麻痺は脳卒中などの後遺症によって体の半分に麻痺が残ってしまう障害で多くの片麻痺者は生涯、後遺症が残存します。市販されている杖は体を支えることだけに特化したものばかりで片麻痺者特有の歩き方に合わせて設計されているものはありません。片麻痺者特有の歩き方を続けていると将来的に二次的な運動機能障害につながり、生活範囲をさらに狭める要因となります。手の痛みによって服のボタンが止められなくなったり、ケースによって下肢障害にもつながり、歩行不能となることもあります。そこで私たちは杖によって歩き方を補正する研究をしています。特に歩行時の姿勢に着目し、杖によって偏りのない歩行に繋げることで二次的な運動機能障害を予防することを目指しています。

・ベンチャー大賞の感想

一次予選、二次予選、決勝大会、メンタリング、ブーストセミナーなど、すべてのイベントにおいて非常に貴重な意見をいただくことができました。特にステージが上がるにつれて、物ありきで事業を進めていこうとしていた点に気付かされていきました。良い研究結果が出て、それが解決しなければならぬ課題でなければ、なんの意味も持ちません。そんな当たり前のことを再認識できたコンテストでした。

・今後の展望

今回のコンテストを経て、事業プランを1から見直すことにしました。片麻痺者の抱える課題や原因について深く考え、利用者と話し、論ずべき内容を定め、学習を繰り返していくことをきっちりとおこなっていくことが大切と考えました。また、成長戦略や人事計画、財務計画、資本政策など今まで手をつけてこなかった点についても様々の方の意見を踏まえながら丁寧に計画を立てることをひとまずの目標としています。

【チームメンバー構成】株式会社Welloop 1名、おもちゃん株式会社 1名



社会人部門第3位

介護情報プラットフォームを構築し、介護にイノベーションを効率的に届ける（FORWARD）

・事業内容紹介

我々は患者さんやご家族から、介護に対する不安をなくし、明るい介護生活を実現することをミッションとしております。突然始まる介護、情報が少なく自分の介護生活を具体的に想像できないため、患者さんご本人様やご家族は不安を持ちます。そこで、介護保険で作成されるケアプランとそれに付随する介護者の生の声を共有できるプラットフォームを構築し、介護生活を具体的に想像できるようにすることで、漠然と持つ不安を解消します。また介護生活が始まってからの不安には、介護業界初のセカンドオピニオンを提供することで解決します。この2つのサービスで、介護に悩まない社会を実現します。

・ベンチャー大賞の感想

こちらの健康医療ベンチャー大賞では、自分たちだけでは絶対に経験できないような貴重な経験をさせていただきましたので、大変感謝しております。私たちのチームは、はじめての起業のため、参加前はわからないこと、至らない点が多々ありました。そのような中で、ブーストセミナーでは日頃愛読している本の先生の講演を聴講できたり、決勝前のメンタリングではベンチャーキャピタリストの方にアドバイスをいただいたり、また審査の過程でも審査員の方々に様々なフィードバックを頂き、自分たちのビジネスプランをブラッシュアップがすることができました。さらに今年度より一次審査はポスター発表となっているため、他の参加者の方々と横のつながりも作ることができ、今後の財産になると思っております。最後となりますが、来年度以降参加を検討されている方々にも間違いなく貴重な経験となると思いますので、ご参加をお勧めします。

・今後の展望

サービスを開始するために、まずは実際に使ってもらい介護家族の方たちに対してベータ版を配布し、ユーザーインターフェイスやユーザーイクスペリエンス(UI/UX)の技術的な実証実験を行おうと考えています。そのための開発活動が直近あります。それと並行して、本サービスでは多くのケアマネージャーの方々、患者様やそのご家族様、さらには行政などにもご協力いただく必要がありますので、協力者を得るための活動も増やしていきたいと考えています。

【チームメンバー構成】慶應義塾大学リハビリテーション医学教室 1名、ソニー株式会社 1名、Tigerspike 1名



ストレスの病から高齢者を守る Savior from stress(team S-Face)

カメラを使って介護に精神という概念を持ち込む、全く新しいSFシステムを紹介します。

【チームメンバー構成】市川高等学校 2名、法政大学国際高等学校 1名



某-soregashi-(MMNA)

中高年の生活の改善や安心して他者と繋がる事を促し、認知症と関係が深いフレイルを予防するアプリを提案します。

【チームメンバー構成】慶應義塾大学理工学部1年 2名



転倒音認識による異常検知・通報システム(succeed)

転倒音探知AI「APHTY」によって、転倒を即座に検知し、発見までの時間を劇的に短縮します。

【チームメンバー構成】慶應義塾大学医学部1年 1名、大阪大学医学部2年 1名、順天堂大学医学部2年 1名、東京都立日比谷高校1年 2名

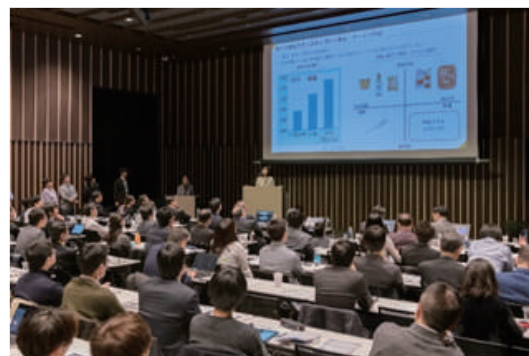


社会人部門ライティングチーム紹介

食器で叶える「頑張らない減塩」(株式会社ORANGE kitchen)

ハードテックで叶える「がんばらない減塩」です。調理器具や食器をIoT化しアクティブな減塩からパッシブな減塩を実現します。

【チームメンバー構成】慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科 1名、慶應義塾大学大学院経営管理研究科 1名、社会人1名



時が止まったままの介護衣料業界に革命を起こしたい(りゅうぐうのつかい ブリッシモ株式会社)

新しい病衣を提案します。着る人、着せる人にやさしく、施設のブランド力UPにも貢献する衣類です。

【チームメンバー構成】ブリッシモ株式会社 3名



Bipolar Diary-双極性障害用健康管理アプリ(株式会社It's Me)

双極性障害特有の日々の「気分」の変化と「行動」を管理・共有出来る日本初の双極性障害用健康管理アプリです。

【チームメンバー構成】アドビシステムズ株式会社 1名、本田技研工業株式会社 1名、日鉄日立システムエンジニアリング株式会社 1名

産業保健師のシェアリングサービス(Flow)

保健師を企業でシェアし、低コストで健康管理をします。保健師の持つ能力を最大限発揮し会社の利益に貢献します。

【チームメンバー構成】社会人 1名



学生部門 応募総チーム数41

1. 目指せ！サステナブルヒューマン！
～サステナブル体操 スマホ向けアプリ「STB」の提案～（常葉大学法学部）
2. にっこりプロジェクト（慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科）
3. ドクターズラウンジ スクナビコナ（東京医科歯科大学医学部医学科、他）
4. ブラシと持ち手が別々の歯ブラシ通販（学習院高等科）
5. 大切な人へ、食べる喜びと栄養を贈るチョコレート（北海道大学医学部医学科、他）
6. Sharelife（慶應義塾大学医学部、他）
7. ストレスの病から高齢者を守る Savior from stress（市川高等学校、他）
8. 医療ハブの形成による医者と患者のマッチングサービス（慶應義塾大学理工学部、他）
9. Wilico（慶應義塾大学、他）
10. 肢体不自由者の性行為介助機器（高知大学）
11. 転倒音認識による異常検知・通報システム（慶應義塾大学医学部医学科、他）
12. AIかかりつけ薬剤師（慶應義塾大学理工学部生命情報学科）
13. フレグランス君（慶應義塾大学医学部、他）
14. GramEye（大阪大学医学部医学科）
15. 某-soregashi-（慶應義塾大学理工学部）
16. タンピック（東北大学歯学部）
17. STDetector（慶應義塾大学医学部）
18. ポケット言語聴覚士-あなただけの吃音改善アドバイザー（慶應ビジネススクール、他）
19. 働く世代の目の健康をトータルサポートするアプリケーションの開発（慶應義塾大学医学研究科）
20. 医食同源自販機（慶應義塾大学医学部）

※応募チームのうちプラン掲載承諾のあったチームのみ掲載しております。

社会人部門 応募総チーム数91

1. 次世代に少しでも負担をかけない為、複数個入りの「ボールカバースセット」を提供し健康、医療、福祉、介護の現場で活用してもらいたい。（あいちゅう企画）
2. 生活の全てが寄付に繋がる社会へ～あなたの日常が紡ぐ尊い命～（スリーハピネス）
3. Bipolar Diary - 双極性障害用健康管理アプリ（アドビシステムズ株式会社、他）
4. 選択肢のある未来プロジェクト（箸factory宮bow）
5. さがそと（無所属）
6. Dental Statusによる医科歯科ボーダレス～口腔内AI画像処理～（歯っぴー株式会社）
7. 点滴デリバリーサービスIvor（株式会社Ivor）
8. 健康支援パーソナルトレーナーと高齢者のマッチングサービス～この指止まれ～（慶應義塾大学大学院経営管理研究科）
9. アトピー性皮膚炎対処材の開発（ソメイヤッコ研究所）
10. 認知症患者の気持ちを可視化する（株式会社耳勉）
11. パーソナライズ・ナースコール（グローバルヘルスコンサルティング、他）
12. 片麻痺者用杖（名称：FUJI）の開発と販売（株式会社Welloop、他）
13. 時間が止まったままの介護衣料業界に革命をおこしたい（無所属）
14. 在宅医療機関との連携を持った高齢者見守りシステム（プレミアリサーチ株式会社、他）
15. 障がい者が運営する老犬ホームとエステサロン（日進市社会福祉協議会、他）
16. 嚥下機能を維持して健康寿命を延伸させる（医療法人ライフサポートわたらせりバーサイドクリニック）
17. 病診連携アプリ1号（東京医療センター）
18. 生きがい発掘カルチャー教室（株式会社ぶらんち、他）
19. calm down（無所属）
20. 錆・孔食検知カメラ（株式会社wish-alize、他）
21. 錠剤オープナーと服薬補助機能を併せ持つ医療補助器具の開発（無所属）
22. 睡眠の質を一段引き上げるロボティクスベッド（Ax Robotix株式会社）
23. 認知症予防対策プラットフォーム（無所属）
24. 「母乳ドック」母乳検査サービス（株式会社こそらぼ）
25. 食器で叶える「がんばらない減塩」（慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科、他）
26. MR営業を効率化して医療費を削減する医療機関検索サービス（無所属）
27. 女性の生涯Wowを創出する統合Femtech拠点「Concetto」（Concetto、他）
28. 産業保健師のシェアリングサービス（無所属）
29. 医療連携プラットフォーム（株式会社メディウエイズ）
30. 弱視・斜視治療用度数可変眼鏡の事業化（株式会社エルシオ）
31. 聴診器 200年越しの再発明 簡易スクリーニングデバイス（いしぐろ在宅診療所、他）
32. 介護情報プラットフォームを構築し、介護にイノベーションを効率的に届ける（慶應義塾大学リハビリテーション医学教室、他）
33. 難治性神経筋疾患患者の社会復帰を可能にする革新的医薬の開発とその製薬化事業（株式会社Triplex Therapeutics）
34. 再生医療による難治性不妊症治療（株式会社キュベレ、他）
35. 新規ウェアラブルデバイス 汗中乳酸センサを用いた医療/スポーツサービス（株式会社グレースイメージング）
36. 60歳台限定セカンドライフ・デザイン（青山学院大学大学院）
37. 病院内に眠るデータを活用して「医は仁術」と収益改善を両立し医療の発展に資する（BioICT株式会社）
38. HAAI（慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科、他）
39. ウェルネスサポートサロン（一般社団法人東京ビジネス倶楽部）
40. メンタルヘルス不調を予防する“京のぶぶ漬け文化”の普及（京おんなの行動スタイルを広める会）
41. 筋肉神社Project 筋運なくして開運なし！（一般社団法人日本トレーナー協会）
42. 希望を叶えるVRプロジェクト（帝京大学医学部救急医学講座総合診療科）
43. スポーツ障害からの早期復帰と競技力向上のためのサービス（無所属）
44. 新開発スタイルのヘルスクエア商品開発支援（CLLATE）
45. 便秘を全自動で改善～全自動体外的腹部振動・マッサージ機～（慶應義塾大学、他）
46. SNS for Medical Doctor（非公開）
47. アートを活用した認知症の早期発見サービス（株式会社あゝのこコミュニケーションズ）
48. 認知症フレンドリー講座（総合プロデュース室）
49. 足先用歩数計（VENUS）
50. つながるーむ（パナソニック株式会社）
51. スマートカルテ（無所属）
52. エクソソーム製造装置の提供（株式会社SCREENホールディングス）
53. どこでも学習ベッド（株式会社セラク）

※応募チームのうちプラン掲載許諾のあったチームのみ掲載しております。

第1回社会人部門優勝 株式会社LTaste

当社は、口の中に貼り付けて食事をする事で、ほとんど食塩を摂ることなく美味しい塩味を感じることができる食品「ソルトチップ（図1, 2）」により減塩をサポートする慶應義塾大学発のベンチャー企業です。私が慶應義塾大学理工学部の実験室にて行っていたテーマを元に、実験室のボスである三木則尚（現・理工学部教授）と共に2017年に起業をしました。昨年には、大手製菓メーカーから出資を受け、製造委託先での生産体制も整いつつあります。本格的な販売を今年から開始する予定で、現在大詰めの商品改良を行っています。

実際に使用された透析患者さんの中には、透析の間にいつも3kg増加していた体重（尿として水分が排出されないため、塩を摂った分、水分によって体重が増える）が、ソルトチップにより1kgに抑えられたと嬉々として話される方もおり、大きな励みとなっています。

出願中の特許も米国にて先に成立し、国内での成立も目前に控えるなど、当初の予定よりは遅い歩みながらも着々と事業を推進しております。また、出資先とは共同の商品開発も行っており、こちらも今年中に上市できる見込みとなっていますので、今年は飛躍の年とできるよう頑張っております。



図1. ソルトチップ



図2. 使用シーン

第2回社会人部門優勝 株式会社OUI (OUI Inc.)

当社は、「医療を成長させる」ことをミッションに、Smart Eye Camera (SEC) というスマートフォンアタッチメント型医療機器の開発と実用化を行っている慶應義塾大学発のベンチャー企業です。

本製品は2018年1月のベンチャー大賞の際にはプロトタイプでしたが、その後開発が進み、2019年6月をもちまして、日本での医療機器登録を完了。同時に国際特許の権利化も行って2019年10月より国内リリースを開始することができ、海外でもベトナム、マラウイ、ザンビア、ケニア、モンゴルなど様々な国での実証を行っています。

私達は、眼科医としてベトナムの貧困地域に対して無料の白内障手術ボランティアに赴いた際に、現地の医療機器そして医師不足と言う問題点に着目し、解決策としてSECを着想いたしました。世界では上記の理由によって、防げるべき失明が増加しております。失明人口は2030年に1億2000万人を超えると推定され、SECを用いて眼科の診療を過疎地域に届けることにより、世界の失明を50%減らすことを目標に、事業を進めております。嬉しいことに、現在仲間が増え、当初眼科医3名で起業した会社でしたが、今では10名を超える方々に支えられながら、世界の失明を減らそうと考えております。



第3回社会人部門優勝 Icaria株式会社

当社は尿中miRNA をバイオマーカーとしたがんの早期診断を目指すベンチャーです。

昨年のベンチャー大賞での優勝後、社員は当時の2名から2020年4月時点で約20名まで増える予定で、半分以上は研究員です。経営陣も構築され、ビジネスとサイエンス両方に強みをもつ取締役2名が就任しております（当社HP参照）。

資金面においては、シリーズAの調達を2020年前期には完了予定であり、大半は着金済み、金額は非公開ですが、日米のVCと事業会社から調達しております。

当時は自社ラボがありませんでしたが、現在はラボを立ち上げ、資金調達が完了したため拡張、東京オフィスも移転致します。また、米国での事業拡大を目的に2020年前期からサンディエゴにもビジネス拠点開設予定です。

研究面では、多くの臨床試験が実施中であり、複数の製薬会社とも共同研究開始予定です。それに伴い売上が立つ見込みとなっております。

がん早期発見検査は2020年年度中にサービス提供予定です。



一次審査/ブーストセミナー

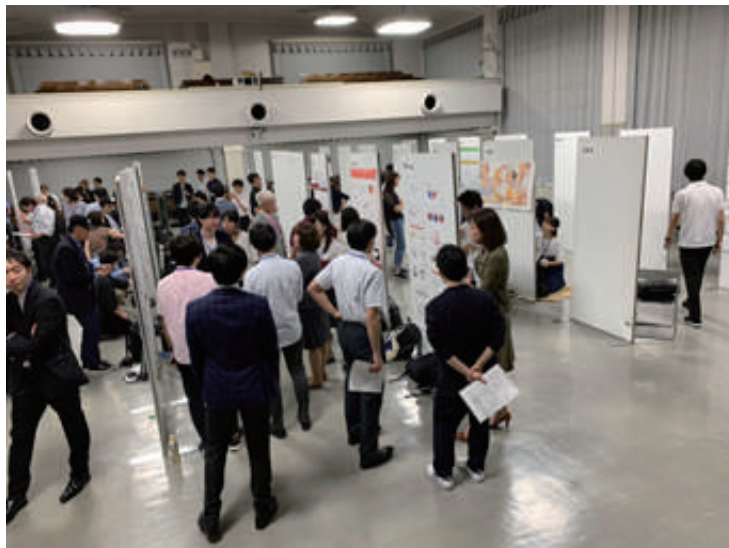
一次審査

今年は初めてポスター形式での審査を行いました。例年は書類審査のみでしたが、専門性の高い審査員からのフィードバックや、参加者間の交流を得ることを目的に、ポスター発表という形式を導入しました。

当日は北里講堂に約70チームが集まり、他のチームのプランを見て交流し、対面で審査を受け質の高いフィードバックを受けたりすることができ、参加された全チームにとって有意義な時間になりました。

【一次審査審査員】

消費者向けビジネス部門：	木村 亮介 氏	ライフタイムベンチャーズ 代表パートナー/ベンチャーキャピタリスト
企業向けビジネス部門：	河合 聡一郎 氏	株式会社ReBoost代表取締役社長/ラクスル創業メンバー
医療機関向けビジネス部門：	目々澤 肇 氏	東京都医師会 理事(医療情報担当) / 目々澤醫院院長
バイオ創薬部門：	許斐 健二 氏	慶應義塾大学医学部 臨床研究推進センター 特任准教授/眼科医
	川合 泰明 氏	慶應イノベーション・イニシアティブ シニアアソシエイト/ベンチャーキャピタリスト
AI・IoT部門：	沖山 翔 氏	アイリス株式会社代表取締役社長/救急医



アントレプレナーシップ3時間ブーストセミナー

プラン応募者向けに、人気ビジネス著書をお呼びしたビジネスセミナーを開催しました。

【登壇者】

田所 雅之 氏	株式会社ユニコーンファーム CEO/株式会社ベーシック CSO
井上 功 氏	株式会社リクルートマネジメントソリューションズ エグゼクティブプランナー
佐藤 義典 氏	ストラテジー & タクティクス株式会社 代表取締役社長



二次審査/ヒアリング

二次審査

ポスター発表による一次審査で選出した学生部門上位10チーム、社会人部門上位11チームから、面接により二次審査によって上位3チーム合計6チームがファイナリストとして選出されました。二次審査における面接内容はプレゼンテーションおよび質疑応答から成り、審査基準は以下6項目に関して各10点満点で採点。その合計点で順位を決定いたしました。

「市場ニーズ、新規性・独自性、実現可能性、社会貢献性、市場規模性、総合評価」

・二次審査員

本郷 有克 氏	慶應イノベーション・イニシアティブ 執行役員
永田 智也 氏	D3LLC Managing Partner, CEO
加藤 浩晃 氏	アイリス株式会社 取締役副社長CSO/デジタルハリウッド大学客員教授
福島 智史 氏	株式会社グロービス・キャピタル・パートナーズ ディレクター
鐘江 康一郎 氏	株式会社クリブラ 代表取締役社長
田澤 雄基 氏	慶應義塾大学精神神経科医師 MIZENクリニック豊洲医院長

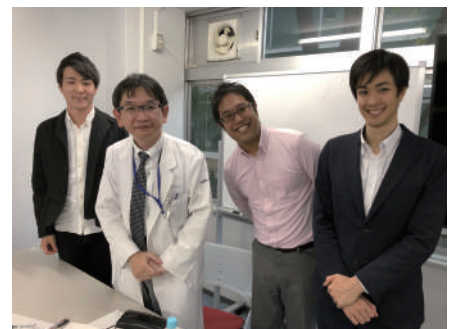


ヒアリング

決勝大会進出チームに対して、医療従事者・専門家から現場の声をきくヒアリングの機会を設けました。各チームのニーズに即した専門家とマンツーマンで意見を交わす機会は各チームに大変好評であった他、慶應学内の先生方にベンチャー大賞を周知する良い機会となりました。

【ヒアリング講師】

三木田 馨 氏	慶應義塾大学医学部 感染症学教室 専任講師
藤岡 正人 氏	慶應義塾大学医学部 耳鼻咽喉科学教室 専任講師
富里 周太 氏	国立成育医療研究センター 耳鼻咽喉科医師
都築 圭太 氏	慶應義塾大学医学部リハビリテーション医学教室
福島 智史 氏	株式会社グロービス・キャピタル・パートナーズ
木村 亮介 氏	ライフタイムベンチャーズ代表パートナー
川上 途行 氏	慶應義塾大学医学部リハビリテーション医学教室
吉澤 尚 氏	漆間総合法律事務所



Keio Medical App Hackathon

2019年6月30日、7月6日、慶應義塾大学殿町タウンキャンパス主催、健康医療ベンチャー大賞共催にて Keio Medical App Hackathon (K-MAH)が開催されました。2014年の薬事法改正に伴い、アプリケーション単体で医療機器 承認を受けることが出来るようになったことを受け、2日間のハッカソン形式で行われた医療機器アプリ作成コンテストです。

テーマ

医療機器承認や保険収載を目指すアプリケーション、およびそれに準ずる以下のようなアプリケーションの作成を目指します。

- ・生体データを計測するもの
- ・疾患の評価、診断、治療を行うもの
- ・ウェアラブルデバイス、電子カルテなどに連携することで医師の診療をサポートできるもの

概要

多数の応募者から、ビジネスパーソンや医療従事者、デザイナー、エンジニア、学生などの背景を持つメンバーをマッチングし 計25名からチームを構成しました。優勝者には賞金を授与しています。

2日という短い時間でアイデアを生み出し、育てていただくために、医療系アプリ開発や承認制度のプロによる特別講演や相談できる機会も用意しました。



特別講演

1. 富原 早夏 氏 経済産業省 商務・サービスグループ ヘルスケア産業課 医療・福祉機器産業室長
2. 小林 孝徳 氏 株式会社ニューロスペース 代表取締役社長
3. 浅野 正太郎 氏 株式会社Save Medical 代表取締役社長

審査員

1. 望月 愛子 氏 株式会社IGPIテクノロジー 代表取締役CEO
2. 浅野 正太郎 氏 株式会社Save Medical代表取締役社長
3. 吉元 良太 氏 慶應義塾大学ウェルビーイングリサーチセンター 特任教授

アンケート結果

ご出場チームからのアンケート結果

- 顧客の体験価値を見直し、定義し、見直していくことの大切さを実感し、その振り返りを常に意識できるようになった。
- すばらしいメンター陣で大変たすかりました。
- 決勝大会の審査員の方々のフィードバックを二次予選のときのようにもらえるとありがたい。
- 慶應義塾大学の関係者以外の人にとっては少しアウェー感が強かった。一次審査や二次審査は慶應以外の人も歓迎ムードに感じたが、決勝大会だけは違った。シンポジウムももう少し幅広い方が実感できるような内容であってほしかった。
- 懇親会は様々な方々とお話でき、事業にも繋がりそうであり、非常によかった。

ご協賛・寄付企業からの感想

- とても内容が濃く、来年も参加したいと思いました。
- いつも素晴らしい。
- それぞれの登壇者から熱意が感じられて良かったです。

オーディエンスからの感想

- 存在を最近知って聞いていたが、非常にレベルが高く面白かった。こういう良い取り組みはもっと広報すべきだと思います。
- 慶應大学の変革への意気込みを感じました。
- 面白いビジネスプランが多く、今後の進展が楽しみです。
- 予想以上に充実した内容でした。来て良かったです！
- 学生でもここまでレベルの高い発表だとは思わず感動しました。
- 学生がここまでできるとは、海外大学に比べても引けはないと思います。
- 皆さんのアイデアと実行力の高さに驚き、決勝やライトニングに残れなかったチームも全てプレゼンを聴いてみたい。
- クオリティ高く、少しニッチだがサービス提供しやすい現実的な目線があり面白かった。ぜひビジネス目線をさらに意識してレベルを上げてほしい。
- 企業の中からイノベーションが生まれ難い中で、大学発のイノベーションは大いに期待するところです。日本の大学のあり方が変わることで、日本の新時代の幕開けに期待。
- 初めて見るベンチャーばかりだったので、ピックアップに工夫されているのかなと思いました。

第4回の総括と次回の展望

皆様からの多大なご支援により今年度も第四回となる健康医療ベンチャー大賞を開催することができました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

ベンチャー大賞への応募ビジネスプランは回を重ねるごとに増加しており、今回は122のプランの応募がありました。応募チームの内容も、年々多様性が増しており、医学部から慶應義塾全体へ、さらには慶應義塾外へ参加の輪が広がってきていることを実感しております。今年は関西や九州など全国からの応募も多く、高校生からの応募も複数ありました。

またこのベンチャー大賞を通じて、応募チーム間のインタラクションを生み出すことが、参加チームの新たな推進力になっていると実感しています。単に優秀なプランを選考するだけのビジネスプランコンテストではなく、参加を通じて“育てる”ベンチャー大賞というコンセプトが実現してきています。

このインタラクションを通じてベンチャーを育てる仕組みの一環として、今年からはじめて1次審査を書類審査からポスター審査に変更しました。これにより昨年度までは書類のみで落選してしまっていた80以上のチームが、信濃町の北里講堂に集まり、互いのプランが審査員に評価される場に参加し、切磋琢磨する場が生まれました。

学外のビジネスコンテストではポスター審査という形式はこれまでなく、審査員を含めた参加者からアカデミア発らしい素晴らしい企画だとコメントを多数頂くことができました。

また、慶應医学部が主催する強みをより活かすため、今回から2次審査を通過したすべてのチームに、そのチームのプランに最適な医療関係者、研究者を学内から探してマッチングし、アドバイスをを行うようにしました。

特に医学部以外からの参加者にとっては、医療の現場を知る医療者、また特定の医学研究領域に通じた研究者との繋がりには他では得難い財産になっています。

関係者の皆様の多大なご支援のもとで、毎年少しずつ企画に改善を重ね、健康医療ベンチャー大賞は医学部発のビジネスコンテストとしてひとつの完成形に近づいてきていると感じています。

2020年度は第五回という節目の年になりますので、より一層完成度の高い企画を目指し、日本の医学部から世界の健康に貢献するベンチャーを発進する場として行きたいと考えており、引き続き関係者の皆様のご理解とご支援を賜りたく、よろしくお願い申し上げます。

実行委員長 田澤 雄基 (精神・神経科学教室 助教)

後援・共催・ご協賛企業様

後
援



共
催



ご協賛企業様



SONY



個人協賛 今里 美知康 様 (慶應義塾大学経済学部 昭和23年卒)

デザイン協力

清水大輔

SIMIZUDESIGN

実行委員

■お問い合わせ窓口 慶應義塾大学信濃町キャンパス 学術研究支援課(産学連携担当)
contest@keio-antre.com

■実行委員一覧

田澤雄基	慶應義塾大学医学部 精神・神経科学教室
市原雄一郎	慶應義塾大学医学部 整形外科科学教室
大岡令奈	慶應義塾大学医学部 産婦人科学教室
都築圭太	慶應義塾大学医学部 リハビリテーション医学教室
森澤和美	慶應義塾大学医学部 小児科学教室
竹内力	慶應義塾大学大学院医学研究科 博士課程
伊藤嘉玖	慶應義塾大学大学院理工学研究科 修士課程
吉岡佑士郎	慶應義塾大学医学部 4年
金城めぐみ	慶應義塾大学医学部 3年
岡田紗季	慶應義塾大学総合政策学部 2年
韓理美	慶應義塾大学看護医療学部 2年
木村渚	三井不動産株式会社
松長卓志	LiFE Investors株式会社



主 催
慶應義塾大学医学部

<https://www.keio-antre.com/>